

【資 料】

文献からみた小児看護技術教育の実態

倉 田 節 子*

【要 旨】

少子化の影響を受けた実習環境の中で、子どもに接した経験の少ない学生への技術教育が重要視されているが、小児看護学教育においては十分発展している状況とはいえない。小児看護学教育の研究の中で、技術教育に関する研究は少なく、その実態は明らかにされていない。そこで、この研究は、文献検討により、小児看護技術教育の実態を明らかにすることを目的とした。

その結果、技術項目や到達度の検討は多く行われていたが、小児看護技術のとらえ方は研究者により異なっていた。しかし、小児看護で重要視されている技術項目は、カリキュラム改正を経てもほとんど変化がなかった。また、技術演習の検討が不十分であり、具体的に技術をどのように教授しているか、教育を提供する側からの研究が少ないことが明らかになった。

【キーワード】小児看護技術、技術教育、技術演習

はじめに

1968年の保健婦助産婦看護婦学校養成指定規則の改正（以下カリキュラム改正という）により、看護技術という科目が設定されてから、看護基礎教育の中で技術教育は重要な位置を占めてきた。さらに、この10数年の間に行われた2度にわたるカリキュラム改正は、より質の高い看護を提供することのできる看護職者の育成を目指すものである。つまり、対象に合った看護を実践するための判断能力や問題解決能力の育成に加え、理論的に裏付けられた熟練した看護技術を、対象の状況や個別性に合わせて適用する実践力の育成の必要性がますます高まり、技術教育の重要性が再認識されているということである。

しかし、一方で、看護技術について様々なとらえ方が存在し（桑野，川崎，1991；上村，2001）、技術教育についても教育関係者の見解の相違がある（田島，1994）ことが指摘されている。また、これまでの思考力育成を重視した看護基礎教育が技術力低下を招いたともいわれ、加えて生活体験の少ない学生への技術教育の困難さ等が問題となっている。その中で、最近では看護系学会において看護技術についての交流集会被開催されたり、看護系学会

雑誌で技術教育の特集が組まれる等技術教育再考の動きが見られている。

このように、看護基礎教育における技術教育の重要性が再認識されていながら、小児看護技術教育においては十分発展している状況とは言い難い。小児看護学では、対象が乳児期から思春期まで変化に富んだ発達段階であることから、対象理解の学習に教育の力点が置かれることが多い。これは、教育の現場として重要な位置を占める病院で、小児病棟の閉鎖や混合病棟への移行が進み、学生が受け持てる子どもが少ないことや、学生自身も子どもと接した経験が少ないことから、対象理解のために多くの指導を必要とすることとも関連する。

実際に小児看護学教育に関する研究では、教授方略・工夫・その成果に関する研究が最も多く、特に対象理解についての教授方略・工夫に関する研究は多数存在する（舟島，定廣，1995；古賀，1997）が、技術教育に関する研究は少なく、そのため何が小児看護技術教育において問題となっているのかほとんど明らかにされていない。子どもとその家族を取り巻く環境は著しく変化しており、それに対応する看護を実践できるようにするためには、技術教育の充実が重要である。

* 日本赤十字広島看護大学 kurata@jrchn.ac.jp

小児看護技術教育を発展させていくためには、まず技術教育がどういう状況なのかを概観し、その実態をとらえる必要があると考えた。そこで、小児看護技術教育に関する文献について、①カリキュラム改正による小児看護技術教育の変化、②技術演習の内容・方法、③実習における小児看護技術の経験、④看護基礎教育で必要とされる小児看護技術、の観点から実態を明らかにしたので報告する。

用語の定義

1. 技術教育

看護実践に必要な技術の習得を目的とする教育

2. 技術演習

看護実践に必要な技術の習得のために、学内において講義以外の方法で実施される授業

研究目的

文献より小児看護学における技術教育の実態を明らかにする。

研究方法

1. 方法

文献研究

2. 文献検索の方法

1990年～2000年の「医学中央雑誌」CD-ROMより、「看護技術」「教育」「教育方法」「学生」「実習」「小児」「小児看護」「小児看護技術」をキーワードに文献検索した。「最新看護索引」では、同期間においても検索を拡大し、得られた文献の中から小児看護技術教育に関して言及している27文献を抽出した。

結果

1. カリキュラム改正による小児看護技術教育の変化

文献検索の期間である1990年から2000年の間には、1990年と1997年の2回カリキュラムが改正されている（以下1990年改正、1997年改正とする）。1990年改正後から1997年改正までの文献は16件で、1997年改正後の文献は11件であった。

27文献のうち、カリキュラム改正によって小児看護技術教育を見直したことを明記しているものは11件であった。1990年改正におけるものは5件で、看

護基礎教育に関するもの3件と卒後教育に関するもの2件であった。1990・1997年改正両方におけるものは6件で、看護基礎教育に関するもの1件と卒後教育に関するもの5件であった。1997年改正におけるものはなかった。ほとんどの文献が実習時間が減少したことから、効果的な小児看護技術教育を検討することを中心課題としていた。

例えば、乳児を対象とするおむつ交換や沐浴等の技術経験項目を設けていたところでは、受け持ち患児の年齢によっては経験が困難な状況となり、項目の見直しを必要としていた（奥野、日沼、海老澤、岡村、藤枝、1995）。これを解決するために、受け持ち患児以外での技術の経験の機会を持つことが必要であるという意見があった（菅、山本、中野、2000）が、技術適用の良否や評価、個に合わせた技術の応用などの教育的視点から考えると、安易にできない場合もあるとの指摘があった（岡本、山口、1992）。実習時間減少となっても、その中で技術の経験を維持させるための工夫と共に、その場合には、単に回数を増やすための経験ではなく、対象に合わせた技術の提供を考えられるように指導することの必要性が示されている。

カリキュラム改正が新卒看護婦の技術習得状況にどう影響したのかを、卒業6ヵ月、1年後に調査した結果から見てみると、技術演習や実習での経験が卒後の技術習得に関連していることが明らかになった。技術演習や実習で多く経験する技術は、卒後の技術習得率も高かった（中野、神徳、山本、菅、吉武、1998；山本、中野、菅、神徳、吉武、1999；菅、山本、中野、神徳、2000；山本、菅、中野、神徳、2000、山本、菅、中野、2000）。

多くの文献が取り上げていた項目は、バイタルサイン測定、身体計測、清拭やおむつ交換等の日常生活援助技術であり、他に小児看護に特有な技術として、穿刺・酸素吸入・与薬・採血等があがっていた。これらの技術項目は2度のカリキュラム改正を経てほとんど変化がなかった。

以上のように、カリキュラム改正による小児看護技術教育の変化として特徴的だったのは、実習時間が減少したことに対して、小児看護技術の項目選定の妥当性について検討されていたことだった。

2. 技術演習の内容・方法

技術演習の実態について述べている文献は、4年制大学における技術演習の実態調査の1件のみであった。技術演習は授業時間内や実習直前に多く実施され、演習項目はバイタルサイン・身体計測・沐浴・

清拭・注射・与薬・輸液管理・調乳・離乳食・採血・採尿・酸素ボックス・酸素テント・経管栄養・保育器等日常生活に必要な技術および小児看護特有の技術が選択されていた。

技術演習の合計平均時間は9.3時間で、その実施方法は、学生がグループ毎に演習する、教員がデモンストレーションをする、学生個人で演習する、ビデオを見る、の順に多かった。

また、物品の準備や手順を習得させることに焦点がおかれていたこれまでの技術演習に、子どもへの説明や、子どもの反応をとらえられるような方法を取り入れる必要があることが指摘されており（山村、飯村、佐藤、長内、松尾、筒井、中野、込山、1998）、教育方法としての技術演習を検討する必要性が示された。

技術演習の具体的方法について述べている文献は2件であった。1件は、対象の状況を認知し、状況に即したケアを考えるための思考能力を育成できるような技術教育の必要性から、状況設定した子どもに対してどんな援助を行えばよいかを学生に考えさせるものであった（小林、西脇、添田、布施、島田、1997）。もう1件は、モデル人形に命名させて学生の情意領域の学習効果を高めようと試みたものであった（斎藤、藤原、野村、後舎、1990）。

学生の思考過程の分析や演習後の学生の反応から、具体的なイメージが描けるような事例提供は学生の思考能力を高め、また、モデル人形でも実際の状況が思い浮かぶように教員が関われば、学生の関心が高まり、これらの演習方法は効果があったとしている。

今回抽出した文献の中で技術演習に関するものは少なく、また、教授側の検討が十分ではない状況が明らかになった。これは教員が技術演習の工夫をするにあたって参考にするものが少ないことを示している。

3. 実習における小児看護技術の経験

実習における学生の小児看護技術の経験に関する文献は16件であった。実習における看護技術経験は、実習施設の特性や受け持ち患児の年齢・疾患、付添いの有無等によって影響を受けていた。

小児病棟、障害児施設では生活援助技術を経験しやすく、未熟児センターでは測定技術や未熟児・新生児に特有な技術が経験しやすい。また、施設に関係なく、学生が経験しやすいのは生活援助技術、測定技術であり、診療介助技術は経験の機会が少なかった（福井、2000）。

受け持ち制に技術実習を取り入れた実習方法に変更したところ、技術の体験率が上昇したという報告（小林、桑野、門脇、山本、寺井、1991、1992）や、実習病棟が慢性病棟に変更したことから、急性病棟と外来での実習を取り入れ、技術経験を維持できたとの報告があった（臼井、橋爪、上本野、川出、1995）。

また、付添いの有無との関係では、バイタルサイン測定や遊びの援助、環境整備等は、付添いの有無に左右されず経験できていたが、排泄の援助、食事介助、おむつ交換等は、付き添いがあることで経験率が低かった。これについて、母親を含めた看護を考えるために、看護者としての役割を学生が認識できるよう意識づける必要があると述べている（濱中、児玉、太木、日沼、中村、大矢、吉武、1996；岡本、山口、1992）。

このように、実習における技術経験は、実習施設の様々な条件によって制約を受けている状況が明らかになり、それに対して、効果的な実習のための実習施設の選択および実習方法の工夫を行って解決を図っていた。

技術項目によって実習での経験や到達度に差が見られることも明らかになった。バイタルサインや身体計測は技術演習や実習での経験が多く、到達度も高い。一方、難易度の高い指導・教育・診療介助技術は経験、到達度ともに低い。対象理解、状況判断を要するコミュニケーション技術は、経験は多いが到達度は低い（菅 他、2000）。また、実習で経験すべき技術項目や到達レベルの検討も多くされていたが、学生が実習で何をどれだけ経験できたかという実態からの検討がほとんどであった。また、到達レベルは、「できる」から「できない」を5段階あるいは3段階で評価しているものが多かったが、何を基準に「できる」としているのかは不明であった。

小児看護技術の構成と項目は様々な設定があり、項目数は13～100にわたっていた。項目設定の根拠として、先行研究を参考に設定（上野、西元、1993；松本、堀田、1997）、教育内容・実習施設の背景・研究者の実践経験から設定（中村、小野坂、大西、山崎、1998）等の記載があったが、記載のない文献も多かった。技術の構成については、教員や看護婦への調査結果をカテゴリー化し、小児看護技術は、生活援助、測定・計測、症状観察、治療処置技術で構成される（北島、1991）という報告があった。

実習施設や実習を行う学生の状況も様々であり、小児看護技術として何がどれだけ習得できたらよいか、という項目や到達レベルの設定は一様ではなく、

小児看護技術のとらえ方は共通認識されているとはいえない。

4. 看護基礎教育で必要とされる小児看護技術

臨床の看護婦、婦長を対象に調査を行うことによって、看護基礎教育で必要な小児看護技術を検討した文献が7件あった。

技術演習や実習での経験が多いバイタルサイン・身体計測や基礎的な生活援助技術は、卒後の到達度、婦長の期待度も高い。一方、診療介助技術・指導技術および挿管中の患児の沐浴や自己導尿の指導等難易度の高い技術や、実習中に遭遇することが少ないと思われる技術は、卒後での習得が期待されていることが明らかになった。また、対象理解、状況判断の必要なコミュニケーション技術は、在学中の経験は多いが、到達度は低く、卒後も指導が必要である(上野、西元、飯村、吉武、1992; 山本他、1999; 菅 他、2000)。このように項目によって、看護基礎教育での確実な習得を望むものと、卒後での到達に期待するものとを明らかにしていた。これは、学生が実習において経験できた技術項目と同様の結果を示していた。

婦長の新卒看護婦への技術到達の期待度を16年間の変化で見た調査結果では、「できなければならぬ」項目が減少し、「できることを望まない」項目が増加している(上野、西元、1993)。つまり、臨床側の期待度が減少しているということであり、看護基礎教育における技術の到達目標を設定するにあたって、教育側と臨床側の乖離を調整する必要性が示された。

一方、技術教育に必要なこととして、技術の項目ではなく、小児看護の特殊性の中味を重要視する必要性を述べた文献が1件あった。この研究では、看護婦と子どもの観察を行うことから、子どもの状況を読み取ることと、子どもに近づくことが同時に行われた時に、看護婦は目的とする行為を果たしていることを明らかにしていた。これまで、小児看護学教育では、子どもの言語能力や認知能力の未熟さという特殊性から、系統的に観察・アセスメントすることを強調している傾向があるが、子どもの反応をとらえ、状況に応じた技術を使うためには、子どもに近づき、気持ちを分かろうとする態度の育成が必要であることを強調していた(添田、1994)。

以上のように、看護基礎教育では、基本的な看護技術の確実な習得に加え、子どもの気持ちを理解する態度の育成を求められていることが示された。しかし、そのためには、どのようにすればよいのか具

体的な検討には至っていないことが明らかになった。

考 察

以上の結果から、小児看護技術のとらえ方が共通認識されていないことと、技術演習の検討が不十分な状況が明らかになった。そこで、看護基礎教育で小児看護技術をどうとらえ教授していけばよいのか、また、その具体的な方法として技術演習をどのように改善していけばよいのか検討する必要性が示された。

1. 看護基礎教育における小児看護技術のとらえ方

小児看護に必要な看護技術を精選することは、小児看護学の教育を担当する者の責務といえる。しかし、ここで、小児看護技術とは何か、という共通認識がないことが問題となる。今回抽出した文献の中で、小児看護技術の項目や到達度の検討についての研究が圧倒的に多かったのは、小児看護技術の概念が不明確で、そのことから技術教育に対する様々な見解があることを示している。また、小児看護技術として、何をどれだけ教えたらいのかということ、学生が実習でどれだけ経験できているか、あるいは臨床で何を期待されているか、という実態を通して模索しているともいえる。

小児看護技術を明確に定義したものは、筆者が検索した範囲では見当たらず、今回検索した文献においても、多様な構成と項目が存在し、研究者によって小児看護技術のとらえ方が異なっていた。氏家(1977)は、基礎看護技術を看護技術の基礎となるものとし、それと平行または上積みとして各領域の看護学において、その看護学の技術の特色である基礎的技術を位置づけている。これによると、小児看護技術は、基礎看護技術をベースとした小児看護学の特色をもつ技術というとらえ方ができる。

今回の文献検索から、小児看護技術としてバイタルサイン測定、身体計測、および清拭等基本的な日常生活援助に必要な技術の習得が、看護基礎教育に望まれていることが明らかになった。これらの技術は小児看護にだけ存在する技術ではなく、基礎看護技術で習得した知識や技術を活用することが可能である。しかし、対象に合わせた用具の使用や、恐怖心を抱かせず、泣かせないように実施するコツ、発達段階に合わせた説明等を学ばせたいからこそ、小児看護技術の特色としてこれらの技術をあげていることが考えられる。

また、習得を確実にしたい技術の他に、小児看護

に特有な技術として、穿刺・酸素吸入・与薬・採血・抑制（固定）・浣腸・注射・採尿・経管栄養・吸引等が多くの教育機関において取り上げられていた。このように、成人とは違う特別な注意や、特有の器具を用いることが必要とされる技術項目が選択されている。

以上のことから、小児看護技術として必要な技術項目に関しては、共通認識が可能であるといえる。しかも、カリキュラムが改正されても、重要視している技術項目にほとんど変化がなく、小児看護に必要な技術は一定しているということになる。このことは、技術演習の実態調査でも同様の結果が示されている（山村他，1998；江本他，2001）。

したがって、技術教育において問題となっているのは、技術項目や到達レベルの設定というより、実習において経験の機会が少なくなってきたことへの対応であることが考えられる。それを裏付けるように、技術を経験させるための工夫や、これまでの経験回数を減らさないための工夫を検討した文献が目立った。これは、カリキュラム改正により実習時間が減少したことだけでなく、少子化により看護教育の現場として重要な位置を占める病院での小児病棟の閉鎖、混合病棟への移行など、実習施設が変化してきていることへの対応でもありと考えられる。当然入院する子どもは減り、学生が受け持つことのできる子どもは制限される。学生も子どもと接した経験が少なく、また成人の患者ではない子どもの親への接し方に戸惑うことが予測され、多くの指導が必要である。

しかし、今後は、技術の経験回数を増やすことだけを重視した実習にならないよう、なぜこの状況でこの技術を使うのか、という判断を伴った経験にしていかなければならない。さらに、実習での経験の可能性や、実習施設の特性に合わせることも現実的には必要であるが、使用頻度から技術項目を設定するのではなく、小児看護を理解する上で必要な項目として選択されているか、見直す必要がある。

さらに、技術の習得のレベルを表わす到達度の基準を明確にし、学生、臨床指導者、教員が共通理解できるようにしておくことが必要であり、その前提として看護基礎教育における小児看護技術の到達目標を明確にすることが必要である。

また、今回の文献検索では、学生や看護婦側からの実態調査が多く、教育を提供する側がどのように技術教育を実践しているかの実態は明らかにならなかった。今後は、教員の実態を明らかにし、技術をどのように教えるかという視点での研究が進むこと

が望まれる。野本、舟島、杉森（1997）は、実際にケアをしている看護婦の行動から、看護技術の提供を説明する概念を明らかにし、それを技術教育に活かすことを試みている。小児看護学教育においても、このように研究成果を技術教育の中に反映させていくことが今後は必要である。

2. 教育方法としての技術演習のあり方

技術演習は、現場に近い状況を模擬的に作ることで、既習の知識・技術を応用する能力を養うのに有効であり、また、子どもと接する機会の少ない学生の臨床体験を楽にし、不安の緩和の一助となることから、実習を効果的にすることができる（伊藤，1989；片田，1989）。

ここで、演習とは、座学や一斉授業に代表される講義形態では習得困難な教育内容に対して用いる多様な教育方法、と考えられている（杉森，1999）。また、演習の条件として、小集団学習の性格を持った教育方法であることと、学生の創造性、主体性が大きく関与する授業方法であることがあげられている（伊藤，1989）。

教員がデモンストレーションを行い、その後で学生が行う、という演習方法は、演習に必要な創造性を働かせる余地があまりなく、演習というよりも講義をより明確化するための1つの手段ともいえる。したがって、技術演習を、創造性、主体性を備えた演習にするためには、既習の知識・技術を使って、ある状況設定をした患者にそれを適用するにはどうしたらよいかを判断させ行わせることが必要になってくる（伊藤，1989）。

小児看護学における技術演習では、モデル人形を用いても臨場感に欠け、子どもの反応を想像しながら演習することには限界がある。学生同士で演習することができない上に、成人を対象とした技術と違い、発達段階に応じた用具の選択や工夫等新しく習得しなければならないことも多い。このような理由から、これまでは手順や手技の習得に重点が置かれた技術演習にならざるを得なかったことが考えられる。今後は、看護技術を技能レベルで放置せず、状況に合う技術を使うことを教育の視点にしていかなければならないと考える。

この状況に合う技術を使うという学習は、実習において対象との関わりを通しての獲得が、大きく期待されるものである。技術は、実践してその効果を評価することで身につく（吉谷，1992）、また、技術教育は理論と、判断と、実践と、評価を教授する（阿曾，1995）ことであるから、実習は技術の学習

の場として重要である。しかし、小児看護学においては、入院している子どもが少ないことや、子どもと接した経験の少ない学生の状況から考えると、実習で対象と関わることで自体が困難になってきている。実際に、今回の文献検討から、実習における技術経験は、実習施設の状況によって影響を受けていることが明らかになった。このことから、小児看護学においては、技術演習の段階から、対象の状況に応じた技術を使うことを目指した学習が必要であるといえる。

今回抽出した文献の中で、技術演習の方法について検討していたのは、2件という少ない結果であった。しかし、少ないながらも、これまでの技術教育のあり方を振り返り、手順や手技に重点を置くのではなく、子どもの気持ちに近づくことを強調し、また、状況に応じて判断して技術を使うことを学習の要点とした技術演習を試みていた。特に小林ら(1997)は、対象の状況を認知し、その状況に応じた技術を使うことを目指して、状況に出会った時の学生の思考過程を分析し、それに合わせた指導のあり方を検討している。

これは、対象のどのような状況のときに、どのような技術を使うかを考え判断する、という学習を目標としている。つまり、学生が既に基礎看護技術として習得している知識や技術(学習内容)を駆使して、子どもの発達段階、病状等に合わせて使えるよう技術の組み合わせを考える(構造化)ことを意味する。

この学習内容の構造化により、学生は技術を使うときには、既習の技術の組み合わせで使われるということや、どのように使うことが効果的に気づいていく。そして、対象の状況によって、その組み合わせが異なることにも気づいていく(吉谷, 1992)。このように学生の思考が整理できるような場を作ることで、学生の主体性や創造性を刺激し、技術演習は演習の条件を満たした教育方法になると考える。このように学習内容の構造化を意識した技術演習を実践し、さらにその評価まで行うことが、今後の課題である。

小児看護学における技術演習については、何をどのくらい行えばよいかを定める基準は特になく(兼松, 1989)が、各教育機関の小児看護学の目的・目標に照らして、その学習内容を効果的に学習できる最良の方法として、技術演習が選択されているか見直すことが必要である。知識は講義、実技は技術演習や実習、という区分ではなく、講義・技術演習・実習が一連の学習として関連するように考えていか

なければならない。

また、技術演習の教育方法については、教育学における既存の授業方略を看護技術の領域に適用したものがほとんどであることから、看護技術学習に特有な授業方略について検討することや、看護技術学習の構造を明らかにすることの必要性が指摘されている(鈴木, 太田, 永野, 1994)。このことを認識して、小児看護技術教育においても教育方法を検討していく必要がある。

それと同時に、学生の目標やモデルになり得る技術をもった教員の存在も重要である。技術演習におけるデモンストレーションの役割や効果は大きく、教員自身が技術力を維持できるように努力することが必要である。

結 論

小児看護技術教育に関する文献検討の結果、以下のことが明らかになった。

1. 小児看護技術のとらえ方は研究者により異なり、共通認識されていなかった。しかし、小児看護技術として重要視している技術項目に関しては、2度のカリキュラム改正を経てもほとんど変化していないことが明らかになり、共通認識が可能であることがわかった。今後は、実習における技術の経験回数を増やすことを重視するのではなく、状況を判断して技術を使い、経験した技術について評価できるように指導していくことが課題である。
2. 技術演習については、文献数が少なく、また、技術をどのように教授しているか、教育を提供する側からの研究がほとんどされていなかった。学習の成果だけでなく、教授したことの評価を行うことが必要であり、今後は、教育を提供する側の実態を明らかにし、その研究成果を技術教育に活かしていくことが課題である。
3. 技術教育の成果をみるためには、教育目標との関連を検討する必要がある。今回抽出した文献では、その教育機関がどのような教育目標のもとに技術教育を行っているのかをみることはできなかった。また、本研究の限界として、カリキュラム改正の影響をみることは、1997年改正においては、3年という短い期間での文献では困難なことから、27件と文献数が少ないことから、一般化することが困難であることがあげられる。

本研究は、日本赤十字広島看護大学の共同研究費の助成を受けて行ったものであり、要旨を第21回広

島県小児保健研究会で発表した。

文 献

- 阿曾洋子 (1995). 看護技術教育と臨床実習の変化. 看護教育, 36 (8), 662-667.
- 江本リナ, 飯村直子, 伊藤久美, 安田恵美子, 阿部さとみ, 長田暁子, 込山洋美, 筒井真優美, 渡部真奈美, 福地麻貴子, 小村三千代 (2001). 看護系大学における小児看護学実習の準備と実際. 日本小児看護学会誌, 10 (1), 59-63.
- 福井景子 (2000). 実習施設別にみる小児看護技術経験状況. 福井県立大学看護短期大学部論集, 10・11, 41-54.
- 舟島なをみ, 定廣和香子 (1995). 小児看護学教育研究の動向と今後の課題. 看護教育, 36 (6), 531-535.
- 濱中喜代, 児玉千代子, 大木伸子, 日沼千尋, 中村由美子, 大矢智子, 吉武香代子 (1996). 付添いのいる病院での小児看護実習における看護ケアの経験—4県の学生に対する調査結果から—. 日本小児看護研究学会誌, 5 (2), 100-105.
- 伊藤暁子 (1989). 看護基礎教育における演習の役割と位置づけ. 看護展望, 14 (3), 305-307.
- 兼松百合子 (1989). 小児看護における学内実習論. 看護教育, 30 (5), 262-267.
- 片田範子 (1989). 小児看護での学内実習のすすめ方. 看護教育, 30 (5), 258-261.
- 北島靖子 (1991). 基礎看護技術教育のあり方 (その2) 小児看護技術. 看護教育, 32 (2), 85-89.
- 小林彩子, 桑野タイ子, 門脇ミツ子, 山本久子, 寺井晴美 (1991). 臨床実習における小児看護技術の体験率について (第1報). 日本看護学会22回集録看護教育, 225-228.
- 小林彩子, 桑野タイ子, 門脇ミツ子, 山本久子, 寺井晴美 (1992). 臨床実習における小児看護技術の体験率について (第2報) —受け持ち患児の疾患と体験率との関係から—. 日本看護学会23回集録看護教育, 124-127.
- 小林彩子, 西脇由枝, 添田啓子, 布施晴美, 鳥田桂子 (1997). 思考能力育成のための小児看護技術教育の検討—状況から学生が想定したイメージとその思考過程—. 日本小児看護研究学会誌, 6 (2), 86-92.
- 古賀峰子 (1997). 小児看護学教育における教育方法の今後の課題—過去10年間の小児看護学教育研究の文献より—. 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録, 22, 277-282.
- 桑野タイ子, 川崎佳代子 (1991). 看護基礎教育における技術教育の課題: 文献検討. 看護教育, 32 (2), 100-105.
- 松本由紀江, 堀田法子 (1997). 小児看護学臨床実習指導における一考察—看護技術の経験と自信から—. 名古屋市立大学看護短期大学部紀要, 9, 149-158.
- 中村慶子, 小野坂仁美, 大西美智恵, 山崎知恵子 (1998). 小児看護学教育における看護技術教育の現状と問題点. 看護技術, 44 (1), 95-101.
- 中野智津子, 神徳規子, 山本靖子, 菅弘子, 吉武香代子 (1998). 小児看護技術の習得に関する縦断的調査—卒業6ヵ月後の新卒看護婦の技術習得状況—. 神戸市看護大学短期大学部紀要, 17, 53-60.
- 野本百合子, 舟島なをみ, 杉森みどり (1997). 看護基礎教育課程における看護技術教育に関する研究—臨床ケア場面における看護技術提供の概念化をめざして—. 看護教育学研究, 6 (1), 1-18.
- 岡本淳子, 山口桂子 (1992). 小児看護学臨床実習における技術経験について—母親参加と実習内容—. 愛知県立看護短期大学雑誌, 24, 39-47.
- 奥野順子, 日沼千尋, 海老澤のり子, 岡村千鶴, 藤枝知子 (1995). 小児看護学における [体験を通して身につける技術] の位置づけの検討—経験状況と学生の自己評価から—. 東京女子医科大学看護短期大学研究紀要, 17, 65-72.
- 斎藤禮子, 藤原千恵子, 野村幸子, 後舎葉子 (1990). 小児看護学教室内実習後の学生の反応—因子分析法を用いて—. 大阪大学医療技術短期大学部紀要, 17, 17-28.
- 添田啓子 (1994). 小児看護婦に求められる知識と技術. 小児看護, 17 (4), 407-412.
- 菅弘子, 山本靖子, 中野智津子 (2000). 基礎教育における小児看護技術教育に関する考察—卒業時における小児看護技術の経験率と到達度の現状—. 神戸市看護大学短期大学部紀要, 19, 87-101.
- 菅弘子, 山本靖子, 中野智津子, 神徳規子 (2000). 新卒ナースの小児看護技術習得に関する縦断的調査 (第1報) —卒業1年間における観察技術・生活援助技術・診療への協力技術に対する自己評価と婦長の評価および期待度との比較. 小児看護, 23 (3), 370-383.
- 杉森みどり (1999). 看護教育学 (第3版). 東京, 医学書院.

- 鈴木純恵, 太田澄恵, 永野光子 (1994). 看護学教育の教育方法に関する研究動向と今後の課題・2 演習・体験学習等に関する研究に焦点を当てて. 看護教育, 35 (11), 890—895.
- 田島桂子 (1994). 看護教育における看護技術教育の再検討. 看護教育, 35 (13), 1059—1065.
- 上村朋子 (2001). 看護における技術について一日米の文献検討を中心として一. 日本赤十字看護学会誌, 1 (1), 29—36.
- 上野美代子, 西元勝子 (1993). 小児病棟婦長が期待する小児看護技術到達度をめぐって. 看護教育, 34 (9), 669—676.
- 上野美代子, 西元勝子, 飯村節子, 吉武香代子 (1992). 小児病棟婦長が新卒看護婦に期待する看護技術の到達度に関する研究. 日本看護学会23回集録小児看護, 165—167.
- 氏家幸子 (1977). 看護技術の科学的実証 (第1版). 東京, メヂカルフレンド社.
- 臼井徳子, 橋爪永子, 上本野唱子, 川出富貴子 (1995). 慢性病棟における小児看護実習についての検討 (1) —小児看護技術経験の側面から—. 日本小児看護研究学会誌, 4 (2), 106—109.
- 山本靖子, 中野智津子, 菅 弘子, 神徳規子, 吉武香代子 (1999). 小児看護技術の習得に関する縦断的調査—卒業6ヵ月後の新卒看護婦の経験から見た技術習得と看護教育の検討—. 神戸市看護大学短期大学部紀要, 18, 27—37.
- 山本靖子, 菅 弘子, 中野智津子 (2000). 小児看護技術の習得に関する縦断的調査 (第2報) —卒業1年間の新卒看護婦の経験から見た技術習得と看護教育の検討—. 神戸市看護大学短期大学部紀要, 19, 75—85.
- 山本靖子, 菅 弘子, 中野智津子, 神徳規子 (2000). 新卒ナースの小児看護技術習得に関する縦断的調査 (第2報) —卒業1年間における指導技術・コミュニケーション技術に対する自己評価と婦長の評価および期待度との比較. 小児看護, 23 (4), 504—514.
- 山村美枝, 飯村直子, 佐藤奈々子, 長内佐斗子, 松尾ひとみ, 筒井真優美, 中野綾美, 込山洋美 (1998). 看護系大学における小児看護学の技術演習の実態と今後の展望. Quality Nursing, 4 (7), 595—598.
- 吉谷須磨子 (1992). 楽しく学ぶ看護教育法 (第1版). 東京, 真興交易医書出版部.

The Actual Situation in Pediatric Nursing Education:

A Review Of Literature

Setsuko KURATA *

Abstract:

As the birthrate decreases, more and more importance is placed on teaching pediatric nursing skills to those students who have fewer opportunities to come in contact with children. However, little consideration is given to the teaching of pediatric nursing, and little research has been done on pediatric nursing education and its teaching methods. This study aims to show the actual situation in pediatric nursing education by reviewing the literature.

This review asserts the following. First, interpretations of pediatric nursing skills vary with researchers. Secondly, the skills on which great emphasis are laid have not changed even after the pediatric nursing curriculum has been revised. Thirdly, there is little research about how these skills are taught.

Keywords:

pediatric nursing skills, education of nursing skills, mastering nursing skills

* The Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing